登場すると覚悟したほうがよい．

5. おわりに

海外のQCというテーマであったが，もともとQCの元祖はアメリカのW. A. シューハートおよびその流れをくんだ人々である．日本にできて，アメリカにできないはずはない．日本のQCサークルの特異性を言うことは，もうやめたほうがよい．

これからが，本当の正念場が展開する．もちろんそのプロセスにはいろいろなタイプがあるだろうが，データをもとにしてすべての問題を解決していくという Fact Control の考えかたは，どこでやっても必ず成功する．

これからが，むしろ楽しみである．アメリカ流，イギリス流など，いよいよ見ものだろう．

TQC/CWQC 特集に当って

小林 竜一

Total Quality Control はフィゲンバウムの提唱したときは全社内の各部署にQCスペシャリストを配置して品質管理の徹底をはかるという趣旨であったが，わが国でのQCは全社員にQC教育を行なって全員でやるQCという形で進歩してきた．これがわが国におけるTQCであり，これは外国へ紹介するときは Company Wide Quality Control と言わないとフィゲンバウムのTQCと混合されるおそれがある．

さて，昨今TQCは一般新聞紙上にもとりあげられるようになったが，記事の多くはQCサークルが中心である．もちろんQCサークルはわが国独自のものであり，製造現場や事務室での能率向上，無駄の排除に大きく役立っており，QC活動の中での重要性も高い．

しかし現在のわが国のQCが達した水準でいえば，基本的な重点は，①方針管理の徹底，②権限機能責任の明確化と管理標準の設定，③品質保証体勢の確立，④源流重点管理の指向，⑤システム的アプローチなどであり，三十数年前のQCの検査によって品質を保証する段階から製造工程での品質の作り込みで品質を保証することに努力していた状態から見れば，きわめて高い段階に到達しつつある．

現在では品質は製造で作り込まれるという段階をこえ，設計の段階では製造で品質を作り込むのに最も適切な設計はどうあるべきかを追求するのが当然であり，またその設計のためにどのようにしてユーザーの欲する真の品質をとらえるか，市場調査と企画の段階で適切な品質の策定が重点的に追求されている．

また従来から企業内にあった部門間の壁（セクショナリズム）の打破のためには部門間を横にわたる各種の機能別委員会（たとえば量管理委員会，コスト管理委員会，品質委員会など）が設けられている例が多い．

かくして現在のQCは管理技術としてみたとき，その精密さを増し，合理性を増してきつつあり，これらの成果はQC先進企業における新製品開発時のみごとな立上りなどに見ることができる．

これらQC事情はわれわれORワーカーとしても大いに関心のあるところであるので，本特集ではQC界で活躍されている方々のご執筆をお願いしてQCの現況をレビューすることにした．なお戦後30年，われわれは現在の状態に到達したが，きたるべき30年では何をすべきか，日本の工業化はどうなるか，予測の問題はQCワーカーのみでなく，ORワーカーの皆様の力をもお借りしたいのである．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．